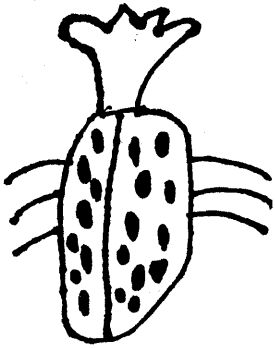
素朴さとパワーと

加用　文男

☆かぶと虫



数年前、ある夏の日、酒の席で聞いた話。

六歳の男の子をもつある親父。四〇歳くらい。

この前、息子が「お父さん、五〇〇円くれ」いうんだ。「なんに使うんだ？」ってきいたら、「かぶと虫買いたい。デパートで五〇〇円で売ってる」いうんだな。

「なるほど、そうか。お父さんも、おまえみたいな子どもん時があった。そやから、おまえがかぶと虫がほしい言う、その気持ちはよう分かる。昔はどこにでもおったけど、今はここら辺りにはおらんもんなあ。買いたいわなあ。しかしなあ、〇〇（子どもの名前）、かぶと虫は、ありゃあ、買うもんとちゃう。捕まえるもんや。な、分かった。ようし、土曜日まで待て、そしたらお父

さんが捕まえてきてやるから」と言った。（ここで、酒飲み友達の他の親父連中から、はっはっはの笑い声、「さすが！」だの「えらいぞ！」だのの掛け声もかかる）

かぶと虫は、夏の日の夜中から夜明けにかけて、林の中で捕まえるもんだ。そこで、俺は、土曜の夜中、車走らせて、山科の、あの辺りの山ん中に入って行ったわな。夜中に山道どんどん入って、もう藪の中や。真っ暗や。これもそれも可愛い息子のためや。な、分かるやろ？

上の方まで来たら道も狭うなって、車もここまで、いう所まで来た。

ようし、ここら辺りならと、車止めて、トランクから虫網と虫籠出して、そこでよう見ると、前の方にも車がとまっとる。はじめはアベックか？　この野郎、ええ事しとるなあ、かぶと虫捕まえに来た俺とはえらい違いや、思うてた。しかし、よくみると一台とちゃうんや、これが。何台もならんどる。五台も六台も。アベックが集団で来る訳ない。よう見たら、みんな俺たちと同じくらいの年格好の、むさっくるしい三〇、四〇の男ばっかりや。それがみんな、手に虫網と虫籠もって山登りしようとしとる。「こんばんは」、やがな。恥ずかしいで。（わっはっはの笑い声）

あの瞬間、頭ん中に「ああ、いま全国の日本中の親父族が、せっかくの休日の日を潰して、夜中に、手に虫籠持って、みんなして山ん中をかけ巡ってるんやなあ」。

そういうイメージ湧いてきてな、恥ずかしいいうより、なんともいえん気持ちやったな。俺は、俺たちは、いったい何しとるんだろう？　ってな。

まったくもって酒飲み共が大笑いした話でしたが、考えてみますと、結構奥の深い話のようにも思います。

子どものために、子どもたちの遊びのためにと、大人たちが頑張る。頑張らなくっちゃと、やればやるほど、それが、どういうわけか、滑稽というより、空転してしまって、何か間違ってるんじゃないか？　と感じてしまう、そういう実状になっているようです。現代は。

しかし、あの話が何故あれほど酒の席で受けたんだろう？

みんなして、大笑いも大笑いで、もういい年頃の親父たちが、口では「みんながやっとるんとちゃうわ、おまえみたいな奴だけや！」「あの山ん中によう行く気になったわ！」などと、皮肉ともあいづちともとれる感想述べながらも、なぜか共感してしまって、似たような経験談に花が咲いたものでした。

☆子どもはずるい！

あるクリスマスイブの夜。ある親父が子どもたちに言った。「毎年思うんだけどな、おまえたちずるいで。クリスマスプレゼント、子どもだけがもらっとるやんか？　お父さんやお母さんもほしいわ！」、子どもが言う「仕方ないやん、お父さん、大人やし」。親父「それでもずるいもんはずるい！　そこでや、今年はお父さんももらおうと思う」、子どもたち「？　？」

「今晩はこれを借りたい、あれを借りたい」と言い張って、子どもから絵本とか、おもちゃとかを借りだして、子どもたちがいったい何をやりだしたのか？　と見守るなか、「お父さんは、今日は寝るとき、ふとんを頭までかぶって寝る、そしたら顔が見えないし、枕元にこの絵本とおもちゃを置いとく。そしたら、サンタさんが来たとき、ああこいつも子どもやなあって思って、プレゼント置いてくれるやろ？　今年はこれでやってみる！」、子どもたち絶句。

さて、あくる日。目がさめてみると、子どもたちの「わーわー」の泣き声が聞こえる。驚いて起きてみると、サンタさんがプレゼント持ってきてくれなかったと、兄妹が泣いているのであった。

親父の全身に寒気が走る。しまった。お母さんも真っ青。

実は、前日、子どもの前でつまらない冗談いって、それで満足して、うっかり寝てしまった。夜中にはっと思いだして、買ってきた「プレゼント」に貼ってあった店

名の「ダイエー」だの「一九八〇円」だののシールはがしにとりかかり、なんだかんだしているうちに、肝心のこと、子どもたちの枕元に置く、を忘れていたのである。哀れ、プレゼントは押入の奥深く。

母親「おかしいわねえ？　サンタさん忘れちゃったのかしら？」、親父（内心、しまったと後悔しつつも）「うーん、おまえたちの日頃の行いが悪いから、今年はナシになったのかもしれんぞ！」などと。子どもたち、恐ろしい形相で見返す。親父、たじたじ。

母親「ああ、ひょっとして玄関とこじゃない？　あそこ見た？」、子どもたちが脱兎のごとく走り去るのを合図に、親父あわてて押入に走り、ついでベランダに走り……。

しょんぼりして返ってきた子どもたちに、お母さん「なかったの？　じゃあ、きっとベランダよ、サンタさんきっと急いでたのよ」に、子どもたち再び脱兎のごとくベランダへ。

やっとの思いで、朝の一騒動が終わったのでした。両親とも、ふうと息をついて。

親父、子ども部屋にいってみる。空の枕元をじっとみて、「ああ、ここに置かれているべきだったんだ」と感慨深く。すると、そこに紙切れがあり、見慣れた子どもの字で何か書いて置いてある。

「サンタさんへ。となりのへやにねているのは、あれはほんとはお父さんです。こどもではありません。まちがえないでください。　あきら」

☆マントにしっぽの大男

ある幼稚園での話。五歳児クラスのある女の子は、四月に入園以来、ずっと一人遊びで、他の子たちと遊ぼうとしない。

担任の先生がふと気づくと、いつも部屋の隅でぼーっ

としていたり、園庭の隅っこで、一人で、砂をいじっていたりしている。秋口になってもずうっとそのまま。

そもそも、誰とどんな遊びをしようが、それは本人の勝手というものです。一人で遊びたければ、それもそれはよし。遊びとはそもそもそういうものなのです。一人で砂いじりしたければ、すればいい。

集団で遊んでも楽しいし、二、三人でも楽しいことはある。一人で遊ぶのも、それはそれでいい。遊びだって、鬼ごっこのように激しいものもあれば、ままごとみたいに穏やかなものもある。それぞれが、それぞれなりに面白さ楽しさを持っている。多様性がある。そういう選択肢を持った上で、今はこれがいいと「選んだ」のであれば、これは自由の行使というものでしょう。

しかし、いつも一人でしか遊ばない、ということになれば、「それを子どもが選んだ」と見るよりは「そこに追いやられている」と見るのが、保育者として普通の感覚です。ニンジンが食べたくなって食べるのはイイ。しかし、いつもニンジンしか食べない、となると「お馬さんじゃあるまいし」と言われるのです。

冗談はさておき、担任の先生は頭を悩ましていました。○○ちゃんを何とかしなくっちゃと。

これまでにさんざんいろんな『援助』をしてきました。「今日は何して遊ぼうかなあ？」「ほら、ほら、見てごらん、○○ちゃんたち、ほら、あそこで、ブランコのってるよ。すごーい、ねえ、ねえ、いってみよ。先生と一緒に」……ダメ。

「A君たち、すごいねえ。この山（砂）、富士山みたいじゃない？　ここから水ながすの？　すごーい！　わー、こっちの山は女の子山？　こっちもすごいじゃない？　でもちょっと負けてるわねえ。女の子みんな呼んでこようよ。ね、そしたら男の子山にも勝てるかもしれないわ。ね、ほら、あそこで○○ちゃん、お砂いじりしているし、来てよって、さそってきてみて！」。

なんてな具合で、保育者、あの手この手。

しかるに、いっこうに効果なし。そして一月、二月、かれこれ、半年……。

ある日、園の職員の一人が産休かなにかで休むことになり、近隣の園に応援を頼んだところ、ある若い男性の保育者が来てくれました。

その男、初めての園にきて、さて何したものかと考えたのか考えなかったのか、まあ、とにかく自分の特性を生かして、子どもたちを喜ばせてやろうと、風呂敷を首に巻いて背中になびかせ、これが「マント」。てぬぐいをお尻から垂らして「しっぽ」。この扮装で、突然園庭を両手を広げたまま「ぶーん、ぶーん」と叫びながら走り回り出した。「マントにしっぽの大男の出現だあ」という図。

子どもたちが喜ばないわけはない。わー、きゃーと騒ぎだして、次々と近寄ってくる。「おじさん、何しにきたの?」、男「おれはほれ、この通り」と走り去っていく。子どもたち、どんどんつられて走りだし、捕まえようと、鬼ごっこふうになる。大集団、わーわー。

その男、園庭のすみで一人イジイジしている女の子がふと目に入り、「ぶーん」と近寄って行く。女の子、ちらとみるが、それ以上の反応なし。男、構わず、目の前で「ぶーん」と一回転。しっぽがしなって、女の子の顔近くを飛び、女の子が払う。と、しっぽが手に弾かれて、ぽとっと落ちて、びっくりしたのは男の方。「やられたー」と叫んで、その場で大の字にのびてしまった。

女の子、担任の先生によると「あの子があんなに愉快そうに笑ったの初めて見た」というほど、大笑いして、大喜びして、大の字になった男を、他の子たちと一緒にわいわいがやがやのぞき込み、男が立ち上がるや、みんなして、再び、わーと追いかけて……。

以来、その男性保育者が加わると、他の子たちとも一緒に走ったり……。とにかく、人とも一緒に遊ぶ姿がみられるようになったとか……。

落ち込んだのは担任の先生。「私がいままでやってきたことは、あれは何だったんだろう? 苦労して、ああしたらどうか、こうしたらどうかと、一生懸命やってきたのに。それで、どうにもできなかったのに、あの人は、あの格好で走っただけであの子の心をつかんでし

まった。遊びの『指導』って、一体、何なのかしら？」

☆パワー

仙台にある「かたひら保育園」という保育園が『ゆらぎつつ子育て』なんていう本（ひとなる書房）を出しています。

この園は別に変わったことをしている園ではありません。ごくごく普通の保育園です。あれこれの紆余曲折の後、設立されて二十年。この間のいろんな歩みを、正直に書いたものなのです。

本としてなかなか面白い。「サクライごんごん」だの、「給食室の紙芝居」だの、見出しだけ見ると何のことかわからん、そういう工夫があって、なかなか読ませるのです。

一歳児が自分で給食室に「おかわり」に行く（想像して下さい。これ、一歳児にとってはほとんど冒険旅行に近いのです）話、朝の子どもたちと、お迎え前の夕方五時三〇分以降の子どもたちの様子の違いなど、描写が面白いし、いろんな話が載っていますが、雪合戦について書いているところがありました。

「（北国だから）雪が降る。すると、じっとしてはおれない。雪合戦となる。ほとんどの子が保母を狙う。圧倒的に多勢に無勢だ。だが、ここ一発の破壊力に関しては保母が数段優っている。だから、接近戦になると、その破壊力がしばしば子どもを泣かす。

保母からの直撃弾をくらって泣きだした子に、『ごめんね、平気？』と駆け寄るような保育を残念ながら、かたひら（保育園）はしていない。『なに泣いてんの、先生なんかみんなから当てられて、もっとひどかったんだからね！』

泣いている子にはもう一発直撃弾をお見舞いする。ただし、今度は当てる場所を冷静に考えて。たいていの子は、これでかえって立ち直り、またしても保母に雪玉を投げつけてくる。

『ひゃー、たすけてー！』……」。

何でもないありふれた記録のようでいて、面白いと思いました。「泣いている子にもう一発」という、この奥の深ーいデリカシイが愉快なのです。

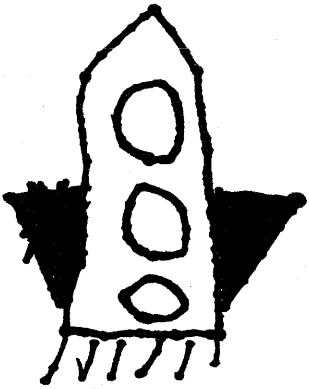
これを「デリカシイ」ととるか、それとも「何もそこまでやらなくても」ととるか、ここに巨大な分かれ目があります。ほとんど人生観の違いでしょう。

しかし、幼児、特に五歳児たちの心性には共通する何かがあるようで、素人じみたヘタな配慮がかえってアダになる、そういう部分があるように思います。

ある園で五歳児たちがくつかくしをしていたそうな。鬼が何人か代わるうち、ある子が鬼になった。クラスに二〇何人もおれば、いろんな子がいる。中にはドンクサイやつもいて、鬼になったはいいが、いつまでたっても見つけられない。本人はそれなりに一生懸命で、はやし立てられるうち、あっち捜し、こっち捜し、うろうろ。しばし、立ち尽くす。そのうち、みんな、なんかダレてくる。雰囲気を察して、このままじゃいかんと、担任が「〇〇君、ヒントあげようか、ヒント、あのな、あっち……」と言いかけると、鬼の子、「いやや、いやや！言うな！　言うな！」。

怒鳴り出して、泣き出したそうな。（こういうときの子どもの泣きは、奥が深いので、しつこくなることが多いものです）。いやはや、幼児といえども馬鹿にはできないものです。

＜プライドを自分で立ち直らせたがる年齢＞に入り始めたというか、むずかしいお年頃なのです。

保育者の柔軟かつ大胆な発想が求められるのです。弱気な大人の自信なげな「援助」ではパワーが足りない。

（京都教育大学）